

〔車〕に伝わる行事に想う

石田 靖

(会員・佐伯市東区)

佐伯市の中心部より約八^き里北東に彦岳(六三九^尺)があるが、その山懐ふとろに抱かれて三十数戸の小さな集落佐伯市大字狩生字車がある。

この地区に三百年続いている一つの風習がある。正月元日の朝は殆んどの家庭では雑煮で祝うものだが、車地区だけは雑煮のかわりにぜんざいを食べる。名付けて俵汁と云う。この地区の殆んどの家が石田の姓を名乗っているが、先祖が竹田から落ちのびて来た時、正月が来ても餅を搗く用意もなく豆を炊き米の粉を練り、それを片手で握り、指の形をつけた団子を俵に見立て、少しでも多くの俵が取れるようにと祈りをこめた悲しくも床しい風習が、ごく最近まで受け継がれていた。

同じような事が佐伯水軍の祖となり大友水軍の中核となった御手洗水軍が、瀬戸内より竹ノ浦に落ちて来た時の正月に食べた物が芋雑煮であったとか。これらを考える時その土地々々の風習や行事に、先人達が血を流し涙した辛苦の日々を顧みる氣持が受継がれ、現在まで生きているものであろう。

さてこの地註に、人皇第三十八代天智天皇御宇即位八歳白鳳三

年癸亥十月十六日始天津児屋根尊……云々と云う尊卑分脈に書かれているそっくりの書き出しで、縦三十数^寸、横五^尺にも及ぶ長尺の一卷がある。この一卷こそ車地区に生活する石田姓を名のる人々の系図である。

遙か遠い昔はさておいて、大分県又は佐伯市に関係する箇所を抜書すると「石田知政の子泰綱に至って豊後に至り大友家に隨身す。元龜元年戸次鑑次と共に藤北の城を守る。薩州勢天正十四歳冬豊後を侵す。泰綱出戦し新納勢を追払うに依って御感状を賜う。其の後大友没落して豊前の国田河の里に住す」とある。また佐伯に来たのは、泰綱が豊前の田河(田川)に住んでから基氏・久綱・秀兼・宗堯・朝堯と続き、次の久宗の時に大野郡矢田の庄に住み、その子助五郎宗綱の時に矢田の庄から現在の地に住むようになった。

宗綱が何故佐伯に落ちて来なければならなかったか、その理由を石田家系図から抜き書きして見ると、「時に石田助五郎宗綱は大野郡矢田の上平野という所に住居致し三百五拾石を開く。その時宗綱に一人の娘あり。容顔麗わしく生れつき美色にて、

此の娘即ち矢田の大庄屋に宿嫁の契り致しありしに、右容色秀でたるに付き同国岡の城の藩士の長に聞こえ懇望せられて無体にこれを嫁にせんとす。然るに矢田の長の妻にかねて約諾の事なれば是も辞す。藩士の長大いに憤り武士の所望に依つて迎えんとする女を許さずば、吾等意地にて鋒の先にても所望せんと烈火の如くなれば、宗綱武勇拔群なれども時の浮沈なれば大いに恐れ、それより他所に住せんと計る。家財金銀などをまとめ銀七駄を馬に負わせて一家皆々佐伯を志し発足、佐伯城下に近い大坂本川中という所に宿す。ここにて宿方端奉謝の為に鋒一本を亭主に与え、翌一家十八人右銀子を持参して同塩月紋之亟の所に宿す。紋之亟懇に世話致しければ皆々安堵の思いにて段々逗留致し、既に三年の星霜を送りぬ。この節城下淡路屋よりの娘を所望され、即ち淡路屋治右衛門方に嫁し、親子契約の上ここにて造酒を営む。しかるに後微運にして大金を損じ、助五郎及助之亟大いに迷惑し、この上は商売を堅く停止し、縁を求め同国海部郡城下より二里ばかり北狩生村なる所に住す。夫より寛永十三年一月五日までに六拾六石六斗三升六合を開き、検地を受け、右の許状を拜領。その御役人連名判形の許状当家に伝わる。これより助五郎宗綱寛永十六年卯歳四月二日病に依り往生す。即ち墳墓所に塔婆有之」となっている。

以上の系図を見て何かかぐや姫の物語にも似ているように思われる。理由はどうであれ竹田の両家と云う所から落ちのびて来た事は間違いないと思われる。

昔は矢田の庄上平野なる地名になっているが、ここには石田・後藤の二つの姓の家があり、岡城の殿様が「両家の者共」と呼んでいた為両家の地名がついたといわれる。又この系図には年号が殆んど記されておらず、助五郎宗綱の死んだのが寛永十六年と記されてあるのみである。

そこで想像してみると助五郎宗綱が四十才位の時に佐伯に落ち、七十才で死亡したとして、寛永十六年（一六三九）より三十年程前になると慶長十四年（一六〇九）になる。毛利高政公が佐伯二万石に移封され、城山の鶴谷城が完成したのが慶長十一年とすると、毛利公に遅れる事約十年前後で、その時には塩月紋之亟方より、鶴の舞う姿にも似た美しい御城が眺望された事であろう。

淡路屋治右衛門とは、また嫁したまゝ天と共に、天寿を全うして同じ御墓に安らかに眠っているやら、あるいはまた酒造業に失敗した為に離縁になり車の里で父と共にその生涯を終えたものか、塩月紋之亟とは、夢は次々に広がるが三百数十年という時の流れには抗し切れず、茫漠とした霧の向うに消えて行き、その姿を再び垣間見る事は出来ないものであろうか。

註 天智即位八歳は白雉（白鳳）八年であり、癸亥は二年三年は甲子である。